

あとがき

東日本大震災をうけて、再生可能エネルギーの利用拡大や、地域の持続可能性の問題がクローズアップされている。なかでも、森林面積が国土の70%を超える我が国では、木質バイオマスの利用が重要な課題の一つである。なぜなら、エネルギー需要のかなりの部分が、木質バイオマスなどによって賄える熱需要であるにもかかわらず、そのための石油代、電気代などとして、莫大な資金が地域外に流出しているからである。また、森林資源の利用は、地域波及効果が大きく、現在でも、地域の生業を生む大きな源であり、さらに、エネルギー統計や、価格では表すことができないような、暮しの豊かさや、安全・安心を、我々に与えてくれるからである。

震災では、その一方で、食べ物でも、エネルギーでも、暮しの安全・安心でも、我々が当事者性を取り戻すこと、すなわち、それらを、他人ごとではなく、我がこととして考えることの大切さを教えられた。当事者性、これは、人間の「内なる世界」とも深く関わる

ことである。

私は、大学で四十年にわたり、工学と環境科学について研究と教育を行ってきた。そこでは、金属や岩石等の破壊現象の計測、地熱開発や土木工事に関わる地下計測の研究などを行う一方、この十数年、地域のエネルギーと地域社会との関わり、とりわけ、エネルギーの地域自給について研究や実践活動を行ってきた。我が国の田舎では、ほんの数十年前までは、食べ物もエネルギーも地域で自給していた。東北の田舎に入り、そのような時代を過ごしたお年寄り、延べ二百五十人以上から、当時の暮しや、人々の思いなどを聞かせて頂き、エネルギーを自給する社会について考えてきた。その内容については、拙著「地産地消のエネルギー」(2011, NTT出版)にまとめてある。

これらの研究活動や、多くの学生の指導を通して、環境に調和した持続可能な社会の実現であれ、再生可能エネルギーの利用拡大であれ、また、最近問題となっている研究者や技術者の倫理の問題であれ、その解決には、科学技術や社会の動向等の情報、あるいは、理屈とか理念、規範のような、外的な働きかけばかりでは、自ずから限界があり、人間の「内なる世界」、すなわち、一つの生命体としての、人間の本性や感性に通じる何か、が必

要であると思うようになった。

そのようなこともあって、内容の是非はともかく、薪とノコギリに関する、私の「内なる世界」を、とにかく描いてみようと思つて著したのが本書である。出来上がったものを見ると、エッセーとも、体験記とも、啓蒙書ともつかない、得体の知れないものになつてしまつた。「内なる世界」は、人によつて、それぞれである。本書に、皆さんの「内なる世界」と根底で相通じるものが、少しでもあり、皆さんのこのころの中に、たとい一時でも、小さな火が灯るのであれば、望外の幸せである。

平成二十六年十月

新妻 弘明